

基本計画書

基本計画									
事項	記入欄							備考	
計画の区分	学部の学科の設置								
フリガナ設置者	ガッコウホクシニイカガクキョウカクエン 学校法人 新潟科学技術学園								
フリガナ大学の名称	ニイガタキョウカク 新潟薬科大学(Niigata University of Pharmacy and Applied Life Sciences)								
大学本部の位置	新潟県新潟市秋葉区東島字山居265番地1								
大学の目的	新潟薬科大学は、教育基本法及び学校教育法の精神にのっとり、生命の尊厳に基づき、薬学及び生命科学両分野の協力的な教育と研究を通して、人々の健康の増進、環境の保全、国際交流や地域社会の発展に貢献する高い専門性と豊かな人間性を有する有為な人材の育成とともに、社会の進歩と文化の高揚に有益な研究成果の創出を目的とする。								
新設学部等の目的	生命産業創造学科は、食品、農環境等の生命産業に関する技術や素材の基礎知識を修得しながら、主として農学分野における経済学及び経営学を駆使することで、企画、開発、経営に優れた専門人材を育成することを目的とする。								
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地	
	応用生命科学部 [Faculty of applied life sciences] 生命産業創造学科 [Department of Innovative Life Sciences]	4	60	—	240	学士 (応用生命科学)	平成27年4月 第1年次	[平成27年度] 新津キャンパス 新潟県新潟市秋葉区 東島字山居265番地1 [平成28年度以降] 新津駅東口キャンパス 新潟県新潟市秋葉区 新津本町1丁目 2019番6 新津キャンパス 新潟県新潟市秋葉区 東島字山居265番地1	
	計		60	—	240				
同一設置者内における変更状況 (定員の移行、名称の変更等)	なし								
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数			
	生命産業創造学科	講義	演習	実験・実習	計	124単位			
教員組織の概要	学部等の名称		専任教員等						兼任教員等
			教授	准教授	講師	助教	計	助手	
	新設	応用生命科学部 生命産業創造学科	4人 (2)	4人 (3)	0人 (0)	0人 (0)	8人 (5)	0人 (0)	26人 (15)
		計	4人 (2)	4人 (3)	0人 (0)	0人 (0)	8人 (5)	0人 (0)	26人 (15)
	既設	応用生命科学部 応用生命科学科	13人 (14)	2人 (2)	0人 (0)	11人 (12)	26人 (28)	1人 (1)	46人 (46)
		薬学部 薬学科	25人 (25)	8人 (8)	0人 (0)	11人 (11)	44人 (44)	8人 (8)	28人 (28)
		薬学研究科 薬学専攻 博士課程	17人 (17)	5人 (5)	0人 (0)	0人 (0)	22人 (22)	0人 (0)	0人 (0)
		応用生命科学研究科 応用生命科学専攻 博士前期課程	11人 (12)	0人 (0)	0人 (0)	7人 (8)	18人 (20)	0人 (0)	35人 (35)
		応用生命科学研究科 応用生命科学専攻 博士後期課程	11人 (12)	0人 (0)	0人 (0)	0人 (0)	11人 (12)	0人 (0)	2人 (2)
	計	38人 (39)	10人 (10)	0人 (0)	22人 (23)	70人 (72)	9人 (9)	111人 (111)	
合計		42人 (41)	14人 (13)	0人 (0)	22人 (23)	78人 (77)	9人 (9)	137人 (137)	

教員以外の職員の概要	職 種		専 任	兼 任	計	大学全体				
	事 務 職 員		22人 (22)	8人 (8)	30人 (30)					
	技 術 職 員		11人 (11)	0人 (0)	11人 (11)					
	図 書 館 専 門 職 員		1人 (1)	2人 (2)	3人 (3)					
	そ の 他 の 職 員		0人 (0)	0人 (0)	0人 (0)					
計		34人 (34)	10人 (10)	44人 (44)						
校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計	平成27年度は既設校舎(新津キャンパス)を利用 [校舎敷地] 借用面積:23,728.44㎡ 借用期間:平成17年3月から平成16年3月までの29年間 [その他] 借用面積:3,026㎡ 借用期間:平成21年4月から平成16年3月までの25年間 平成28年度以降は新校舎(新津駅東口キャンパス)を開設、新学科は既設キャンパスと2校地利用化				
	校 舎 敷 地	86,400 ㎡ (84,123 ㎡)	0 ㎡ (0 ㎡)	0 ㎡ (0 ㎡)	86,400 ㎡ (84,123 ㎡)					
	運 動 場 用 地	14,941 ㎡ (14,941 ㎡)	0 ㎡ (0 ㎡)	0 ㎡ (0 ㎡)	14,941 ㎡ (14,941 ㎡)					
	小 計	101,341 ㎡ (99,064 ㎡)	0 ㎡ (0 ㎡)	0 ㎡ (0 ㎡)	101,341 ㎡ (99,064 ㎡)					
	そ の 他	9,001 ㎡ (9,001 ㎡)	0 ㎡ (0 ㎡)	0 ㎡ (0 ㎡)	9,001 ㎡ (9,001 ㎡)					
	合 計	110,342 ㎡ (108,065 ㎡)	0 ㎡ (0 ㎡)	0 ㎡ (0 ㎡)	110,342 ㎡ (108,065 ㎡)					
校 舎		専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計	大学全体				
		106,983 ㎡ (104,706 ㎡)	0 ㎡ (0 ㎡)	0 ㎡ (0 ㎡)	106,983 ㎡ (104,706 ㎡)	平成28年度に新校舎(新津駅東口キャンパス)を開設				
教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	を開設				
	22室 (16室)	17室 (8室)	17室 (17室)	1室(補助職員0人) (1室(補助職員0人))	0室(補助職員0人) (0室(補助職員0人))					
専任教員研究室		新設学部等の名称		室 数		平成27年度は既設校舎(新津キャンパス)を利用				
		応用生命科学部 生命産業創造学科		9 室 (5 室)						
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	大学全体での 共用分を含む (図書は平成26 年度中に整備を 行う) 共用電子ジャーナル 301種		
	生命産業創造学科	56,325 [10,673] (56,325 [10,673])	489 [340] (489 [340])	138 [138] (138 [138])	654 (654)	1,577 (1,577)	0 (0)			
	計	56,325 [10,673] (56,325 [10,673])	489 [340] (489 [340])	138 [138] (138 [138])	654 (654)	1,577 (1,577)	0 (0)			
図書館		面積	閲覧座席数		収 納 可 能 冊 数		大学全体			
		1,127 ㎡	239 席		76,258 冊					
体育館		面積	体育館以外のスポーツ施設の概要							
		1,530 ㎡	テニスコート3面		多目的グラウンド					
経 費 の 見 積 り 及 び 維 持 方 法 の 概 要	経費の見積り	区 分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	共同研究費等には受託研究費を含む。 図書費には電子ジャーナル・データベースの整備費(運用コスト含む)を含む。
		教員1人当り研究費等		470千円	470千円	470千円	470千円	— 千円	— 千円	
		共同研究費等		4,608千円	4,608千円	4,608千円	4,608千円	— 千円	— 千円	
		図書購入費	2,000千円	7,922千円	7,922千円	7,922千円	7,922千円	— 千円	— 千円	
	設備購入費	50,000千円	50,000千円	0千円	0千円	0千円	— 千円	— 千円		
	学生1人当り納付金	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次			
			1,300千円	1,200千円	1,200千円	1,200千円	— 千円	— 千円		
学生納付金以外の維持方法の概要			上記以外の収入としては、私立大学等経常費補助金、科学研究費補助金をはじめとする競争的研究資金、民間企業からの奨学寄付金等がある。							

既設大学等の状況	大学の名称	新潟薬科大学									
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度		所在地	
		年	人	年次人	人		倍				
	薬学部 薬学科	6	180	-	1,080	学士 (薬学)	1.04	平成18年度		新潟県新潟市秋葉区 東島字山居265番地1	
	応用生命科学部 応用生命科学科	4	120	-	480	学士 (応用生命科学)	1.09	平成24年度	新潟県新潟市秋葉区 東島字山居265番地1	平成24年度より設置したため、定員超過率は1～3年次で計算	
	応用生命科学部 応用生命科学科 食品科学科	4 4	- -	- -	- -	- -	平成14年度	新潟県新潟市秋葉区 東島字山居265番地1	平成24年度より学生募集停止		
既設大学等の状況	大学の名称	新潟薬科大学大学院									
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度		所在地	
		年	人	年次人	人		倍				
	薬学研究科 薬学専攻 博士課程	4	3	-	12	博士 (薬学)	1.22	平成24年度		新潟県新潟市秋葉区 東島字山居265番地1	平成24年度より設置したため、定員超過率は1～3年次で計算
	薬学研究科 薬学専攻 博士後期課程	3	-	-	-	博士 (薬学)	-	平成7年度		新潟県新潟市秋葉区 東島字山居265番地1	
応用生命科学研究科 応用生命科学専攻 博士前期課程	2	8	-	16	修士 (応用生命科学)	1.63	平成18年度	新潟県新潟市秋葉区 東島字山居265番地1			
応用生命科学研究科 応用生命科学専攻 博士後期課程	3	3	-	9	博士 (応用生命科学)	0.56	平成21年度	新潟県新潟市秋葉区 東島字山居265番地1			
既設大学等の状況	大学の名称	新潟工業短期大学									
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度		所在地	
		年	人	年次人	人		倍				
	自動車工業科	2	150	-	300	短期大学士 (工学)	0.64	昭和43年度	新潟県新潟市西区 上新栄町5丁目 13番7号		
附属施設の概要		〔薬用植物園〕 ・本園（新潟県新潟市秋葉区東島） 見本園として、用地3,026㎡、温室1棟135.32㎡、管理棟125.24㎡ ・五頭分園（新潟県阿賀野市畑江） 自然薬用植物園として、用地3,000㎡									

(注)

- 1 共同学科等の認可の申請及び届出の場合、「計画の区分」, 「新設学部等の目的」, 「新設学部等の概要」, 「教育課程」及び「教員組織の概要」の「新設分」の欄に記入せず, 斜線を引くこと。
- 2 「教員組織の概要」の「既設分」については, 共同学科等に係る数を除いたものとする。
- 3 私立の大学又は高等専門学校^{（注）}の収容定員に係る学則の変更の届出を行おうとする場合は, 「教育課程」, 「教室等」, 「専任教員研究室」, 「図書・設備」, 「図書館」及び「体育館」の欄に記入せず, 斜線を引くこと。
- 4 大学等の廃止の認可の申請又は届出を行おうとする場合は, 「教育課程」, 「校地等」, 「校舎」, 「教室等」, 「専任教員研究室」, 「図書・設備」, 「図書館」, 「体育館」及び「経費の見積もり及び維持方法の概要」の欄に記入せず, 斜線を引くこと。
- 5 「教育課程」の欄の「実験・実習」には, 実技も含むこと。
- 6 空欄には, 「-」又は「該当なし」と記入すること。

教 育 課 程 等 の 概 要

(応用生命科学部生命産業創造学科)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
教養必修科目	英語Ⅰ	1前	1			○									兼1
	英語Ⅱ	1後	1			○									兼1
	1年次セミナー	1前	1			○			1	1					兼1 共同
	スタートアップセミナー	1前	2			○			1	1					兼1 共同
	健康管理	1後	2			○									兼1
	英語Ⅲ	2前	1			○									兼1
	英語Ⅳ	2後	1			○									兼1
	英語Ⅴ	3前	1			○									兼1
	英語Ⅵ	3後	1			○									兼1
小計 (9科目)	—	—	11	0	0	—			1	1	0	0	0	兼5	
教養選択科目	生命倫理	1前		2		○									兼1
	科学技術論	1後		2		○									兼1
	法学	1後		2		○									兼1
	歴史学	1前		2		○									兼1
	化学	1前		2		○			1						
	生物学	1前		2		○				1					
	確率と統計	1前		2		○				1					
	スポーツ	1前		1				○							兼1
	中国語Ⅰ	2前		1		○									兼1
	中国語Ⅱ	2後		1		○									兼1
	韓国語Ⅰ	2前		1		○				1					
	韓国語Ⅱ	2後		1		○				1					
	職業とキャリア形成Ⅰ	2前		1		○									兼2 共同
	キャリア形成実践演習	1後-3前		1			○								兼1
	職業とキャリア形成Ⅱ	3前		1		○									兼2 共同
小計 (15科目)	—	—	0	22	0	—			1	3	0	0	0	兼9	—
専門必修科目	基礎科学実験Ⅰ	1前	1					○		1					兼2 共同、集中
	基礎科学実験Ⅱ	1後	1					○	1						兼2 共同、集中
	地域活性化フィールドワークⅠ	1後	2				○			2					オムニバス
	地域活性化システム論	1前	2			○				1					
	学習論	1前	2			○				1					
	ITリテラシー基礎	1前	2			○				1					
	ITリテラシー応用	1後	2			○				1					
	コンビニエンスストア論	1後	2			○									兼1
	食品管理論	2前	2			○			1						
	歴史・風土から見た食環境	2前	2			○			1						
	中食・外食論	2前	2			○			1						
	自然共生論	1後	2			○									兼1
	生命産業に関わる情報システム学	1後	2			○				1					兼1 オムニバス

専門必修科目	ブランド構築論	2前	2			○										兼1	
	情報収集論	2後	2			○				1							
	産業経営管理論	2後	2			○				1							
	生命産業のビジネス論	2後	2			○										兼1	
	生命産業経済学	2後	2			○				2						オムニバス	
	食品科学概論	2後	2			○				2						兼2	オムニバス
	食品開発論	2後	2			○				1							
	環境科学概論	2後	2			○					1						
	生命産業に関わる法学	2後	2			○				1						兼2	オムニバス
	社会調査論	3前	2			○					1						
	論理的思考論	3前	2			○										兼1	
	産業プロデュース論	3前	2			○										兼1	
	レギュラトリーサイエンス	3前	2			○				1						兼1	オムニバス
	産業マーケティング論	3前	2			○				1							
	地域活性化フィールドワークⅡ	3前	2				○				2						オムニバス
卒業研究	4通	10					○			4	4						
小計 (29科目)	—	64	0	0	—				4	4	0	0	0		兼14	—	
専門選択科目	1次産業論	1後	2			○				1							
	2次産業論	2前	2			○			1								
	3次産業論	2前	2			○				1							
	6次産業化論	2後	2			○				1							
	食文化論	2前	2			○										兼1	
	生命産業情報論	2後	2			○										兼1	
	低炭素論	3前	2			○				1							
	環境汚染論	2前	2			○					1						
	コミュニケーション論	1後	2			○					1						
	プレゼンテーション論	2前	2			○					1						
	産業プロジェクト管理論	3後	2			○				2	1						オムニバス
	生命産業デザイン論	3後	2			○					1						
	情報共有論	3後	2			○					1					兼1	オムニバス
	生命産業に関わるコンサルティング論	3後	2			○				1							
	知的財産論	3後	2			○										兼1	
	リサイクル論	3後	2			○					1						
	食品香粧学	3後	2			○				1							
	食品製造論	3前	2			○										兼1	
	環境技術論	3前	2			○					1						
スマートシティ論	3後	2			○				1								
健康食品論	3後	2			○										兼1		
小計 (21科目)	—	0	42	0	—				3	3	0	0	0		兼6	—	
合計 (74科目)		—	75	64	0	—			4	4	0	0	0		兼26	—	
学位又は称号	学士 (応用生命科学)			学位又は学科の分野			農学関係										
卒業要件及び履修方法							授業期間等										
教養必修科目 11 単位、専門必修科目 6 4 単位、教養選択科目から 1 0 単位以上、専門選択科目から 3 9 単位以上を修得し、1 2 4 単位以上修得すること。 (履修科目の登録の上限：4 8 単位 (年間))							1 学年の学期区分			2 学期							
							1 学期の授業期間			1 5 週							
							1 時限の授業時間			9 0 分							

教 育 課 程 等 の 概 要

(応用生命科学部生命産業創造学科)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
教養必修科目	英語 I	1前	1			○									兼1
	英語 II	1後	1			○									兼1
	1年次セミナー	1前	1			○			1	1					兼1 共同
	スタートアップセミナー	1前	2			○			1	1					兼1 共同
	健康管理	1後	2			○									兼1
	英語 III	2前	1			○									兼1
	英語 IV	2後	1			○									兼1
	英語 V	3前	1			○									兼1
	英語 VI	3後	1			○									兼1
小計 (9科目)		—	11	0	0	—			1	1	0	0	0	兼5	
教養選択科目	生命倫理	1前		2		○									兼1
	科学技術論	1後		2		○									兼1
	法学	1後		2		○									兼1
	歴史学	1前		2		○									兼1
	化学	1前		2		○			1						
	生物学	1前		2		○				1					
	確率と統計	1前		2		○				1					
	中国語 I	2前		1		○									兼1
	中国語 II	2後		1		○									兼1
	韓国語 I	2前		1		○				1					
	韓国語 II	2後		1		○				1					
	職業とキャリア形成 I	2前		1		○									兼2 共同
	キャリア形成実践演習	1後-3前		1			○								兼1
	職業とキャリア形成 II	3前		1		○									兼2 共同
小計 (14科目)		—	0	21	0	—			1	3	0	0	0	兼8	
専門必修科目	地域活性化フィールドワーク I	1後	2				○			2					オムニバス
	地域活性化システム論	1前	2			○				1					
	学習論	1前	2			○				1					
	ITリテラシー基礎	1前	2			○				1					
	ITリテラシー応用	1後	2			○				1					
	コンビニエンスストア論	1後	2			○									兼1
	食品管理論	2前	2			○			1						
	歴史・風土から見た食環境	2前	2			○			1						
	中食・外食論	2前	2			○			1						
	自然共生論	1後	2			○									兼1
	生命産業に関わる情報システム学	1後	2			○				1					兼1 オムニバス
	ブランド構築論	2前	2			○									兼1
	情報収集論	2後	2			○				1					
	産業経営管理論	2後	2			○				1					

	生命産業のビジネス論	2後	2		○									兼1	
	生命産業経済学	2後	2		○				2						オムニバス
	食品科学概論	2後	2		○			2						兼2	オムニバス
	食品開発論	2後	2		○			1							
	環境科学概論	2後	2		○				1						
	生命産業に関わる法学	2後	2		○			1						兼2	オムニバス
	社会調査論	3前	2		○				1						
	論理的思考論	3前	2		○									兼1	
	産業プロデュース論	3前	2		○									兼1	
	レギュラトリーサイエンス	3前	2		○			1						兼1	オムニバス
	産業マーケティング論	3前	2		○			1							
	地域活性化フィールドワークⅡ	3前	2			○				2					オムニバス
	卒業研究	4通	10					○	4	4					
	小計 (27科目)	—	62	0	0	—		4	4	0	0	0	0	兼10	—
専門 選択 科目	1次産業論	1後		2		○			1						
	2次産業論	2前		2		○		1							
	3次産業論	2前		2		○			1						
	6次産業化論	2後		2		○		1							
	食文化論	2前		2		○								兼1	
	生命産業情報論	2後		2		○								兼1	
	低炭素論	3前		2		○		1							
	環境汚染論	2前		2		○			1						
	コミュニケーション論	1後		2		○			1						
	プレゼンテーション論	2前		2		○			1						
	産業プロジェクト管理論	3後		2		○		2	1						オムニバス
	生命産業デザイン論	3後		2		○			1						
	情報共有論	3後		2		○			1					兼1	オムニバス
	生命産業に関わるコンサルティング論	3後		2		○		1							
	知的財産論	3後		2		○								兼1	
	リサイクル論	3後		2		○				1					
	食品香粧学	3後		2		○			1						
	食品製造論	3前		2		○								兼1	
	環境技術論	3前		2		○				1					
	スマートシティ論	3後		2		○			1						
健康食品論	3後		2		○								兼1		
	小計 (21科目)	—	0	42	0	—		3	3	0	0	0	0	兼6	—
合計 (71科目)		—	73	63	0	—		4	4	0	0	0	0	兼22	—
学位又は称号	学士 (応用生命科学)			学位又は学科の分野			農学関係								
卒業要件及び履修方法							授業期間等								
教養必修科目 1 1 単位、専門必修科目 6 4 単位、教養選択科目から 1 0 単位以上、専門選択科目から 3 9 単位以上を修得し、1 2 4 単位以上修得すること。 (履修科目の登録の上限：4 8 単位 (年間))							1 学年の学期区分			2 学期					
							1 学期の授業期間			1 5 週					
							1 時限の授業時間			9 0 分					

教 育 課 程 等 の 概 要

(応用生命科学部生命産業創造学科)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
選教 択養 科目	スポーツ	1前		1				○							兼1
	小計 (1科目)	—	0	1	0	—			0	0	0	0	0	兼1	—
必専 修門 科目	基礎科学実験 I	1前	1					○		1					兼2 共同、集中
	基礎科学実験 II	1後	1					○	1						兼2 共同、集中
	小計 (2科目)	—	2	0	0	—			1	1	0	0	0	兼4	—
合計 (3科目)		—	2	1	0	—			1	1	0	0	0	兼5	—
学位又は称号	学士 (応用生命科学)		学位又は学科の分野			農学関係									
卒業要件及び履修方法							授業期間等								
教養必修科目 1 1 単位、専門必修科目 6 4 単位、教養選択科目から 1 0 単位以上、専門選択科目から 3 9 単位以上を修得し、1 2 4 単位以上修得すること。 (履修科目の登録の上限：4 8 単位 (年間))							1 学年の学期区分			2 学期					
							1 学期の授業期間			1 5 週					
							1 時限の授業時間			9 0 分					

授 業 科 目 の 概 要			
(応用生命科学部生命産業創造学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養必修科目	英語 I	<p>Starting from review of basic grammar, this course aims to encourage students to express their opinions in English. More specifically, students learn to (1) develop their ears by repeating basic words, phrases, and key sentences while reviewing grammar, (2) enrich their vocabularies and practical expressions they can use by changing forms and words of the key sentences, (3) read practical materials such as newspaper articles related to their major for improving reading comprehension, and (4) express themselves in English through discussions and debates related to the practical materials.</p> <p>Note : Content of any class is subject to change upon the discretion of the instructor.</p> <p>本科目は基礎的な文法の復習から始まって、生徒が英語で自分の意見を表現できるようになることを目的とする。具体的には、生徒は(1)文法の復習をしながら基本的な英単語、フレーズ、およびキーセンテンスを繰り返し発音することにより、英語を聞き取る耳をつくり、(2)キーセンテンスの言い換えにより語彙や使える表現を豊かにし、(3)生徒の専攻に関連する新聞記事等の実践的な教材を読んで読解力を向上させ、(4)それらについてのディスカッションやディベート等を通して自分の意見を英語で表現できるようにする。</p>	
	英語 II	<p>This course is designed to help students communicate using English in business situations. Through this course, students will develop basic business writing skills through business letters, emails, and assignment papers. Also, basic communication skills will be developed through in-class English presentations. Course materials and topics will include food and environmental issues.</p> <p>主に食品や環境、ビジネスにまつわる話題の中で、ビジネスに使われる簡単なビジネスレターやE-mail、英語での会話などプレゼンテーションを中心に書く力、交流する力の基礎を学ぶ。</p>	
	1年次セミナー	<p>講義全体を通して、自己の将来を見据えて、希望と目標を持つことを援助する。そのために大学4年間で何をやるべきかを、自ら見つけることを講義の目的とする。具体的には本学部・本学科で履修する内容の説明や、企業で働いていたり、大学院で研究している卒業生の話を聞くことを通して、イメージを持って自己の未来図を描けるように支援する。またスモールグループディスカッションを取り入れながら、より主体的に自己の目標を考えようとする雰囲気醸成する。</p>	共同
	スタートアップセミナー	<p>大学で学ぶためには、いくつかの基礎技術を身につけている必要がある。本講義では、大学で学習するために必要な知識や技術(スタディ・スキル)を学び、身につける訓練をする。具体的には、理論的な文章の読み方や書き方、講義ノートの取り方、グループディスカッションの仕方、プレゼンテーションの方法などを具体的な活動を通して学び、身につけていく。</p>	共同
	健康管理	<p>現代社会は、健康ということが個人的及び社会的な意味において、大変重要になってきている。そして、健康は、身体活動(運動やスポーツ)とのかかわりをなくしては考えられなく、その必要はますます増大している。そこで、身体活動の生理的、解剖学的及び栄養学的な効果などを中心に論じる。</p>	
	英語 III	<p>In this course, students focus on reading and listening skills in English. Reading comprehension skills will be acquired by careful reading of papers, articles as well as Websites on the topics of agriculture, food and environmental business. Students are also expected to develop their listening skills. They are encouraged to obtain high scores on the TOEIC test by using its listening materials.</p> <p>食品や環境、ビジネス(農業、食品ビジネス、環境ビジネス)について書かれた英字紙、誌、Websiteの記事を精読し、読解力の養成を目的とする。またTOEIC形式のリスニング教材を使用し、実際にTOEICの高得点が取れるように、チャレンジする学生を指導する。</p>	

教養必修科目	英語Ⅳ	<p>English IV will focus on teaching the students how to have meaningful conversations with colleagues and partners during the course of their business days. The students will learn important communication strategies and approaches, with a special emphasis on communication patterns and interactive styles characteristic of the North American English-speaking community. The students will learn both how to make business contacts and how to express their own ideas in the right ways for developing and maintaining friendly relationships with people in North America, where the general communicative style differs greatly from the Japanese one.</p> <p>英語Ⅳは、仕事中に同僚や仲間と有意義な会話を円滑に行うための方法を学ぶ。この講義では、北米の英語圏で実際に行われている独自のコミュニケーションパターンや対話様式を学びながら重要なコミュニケーション技術と手段を習得する。また、日本と異なる英語圏特有のビジネス環境における友好関係の構築と維持を目的とした他人との正しい接し方や、自身のアイデアの適切な表現法などを学ぶ。</p>	
	英語Ⅴ	<p>English V will take the general communicative skills developed in English IV, and further refine them to suit various business contexts. Students will gain confidence interacting in a wide variety of situations often encountered in the workplace, such as describing their own company and obtaining information about others', giving tours of their company facilities, and so on. A special emphasis will be placed on the special English required for using the telephone for placing orders, making reservations, and other daily professional activities. A TOEIC component will also give the students a competitive edge when taking the TOEIC test for English placement.</p> <p>英語Ⅴは、英語Ⅳで行ったような一般的なコミュニケーション技術に加え、様々なビジネス背景を想定した、より発展的な技術の習得を目指す。自社の説明を行ったり、他社の説明を引き出す際に必要なコミュニケーション、さらに自社施設を説明する状況など、職場でしばしば遭遇する場面を想定したコミュニケーションを、自信を持って行えるようにする。電話対応や注文、予約、日常における特定の業務なども集中的に訓練する。TOEICテストにおいても競争力を付けられるよう支援する内容とする。</p>	
	英語Ⅵ	<p>English VI will stress reading and writing components of daily business communication. Students will have the opportunity to familiarize themselves with a wide variety of written business texts, including e-mail messages and business letters, which will give them the ability to understand both the contents and nuances of such texts. Special emphasis will be placed on teaching the students to communicate their ideas in writing with clarity and accuracy, all with a warm, interactive writing style. As in English V, a TOEIC component will also be included, to further familiarize the students with the vocabulary, idioms and types of questions to expect on the TOEIC test.</p> <p>英語Ⅵは、日常ビジネスコミュニケーションにおけるリーディングとライティングを集中して行う。E-mailやビジネスレターを含む多種多様なビジネス文章にできるだけ多く親しむことで、文章の内容に留まらずそのニュアンスまでを理解する能力を身につける機会とする。対話型で暖かく、また明快で精度の高い文章を書くための考え方にも重点を置いた講義を行う。英語Ⅴと同様にTOEICにも配慮し、語彙や慣用語およびテストでしばしば出題される問題にも親しめるようにする。</p>	
教養選択科目	生命倫理	<p>私たちは《生命の誕生》を称して《生まれる》という言い方をしますが、ヨーロッパ近代諸語では受身形で言い表す。能動態ではなく受動態である。そこには《生まれる》本人の意志や自己決定は何ひとつ働いていない。生まれる場所、時期、性別等々、すべての事象においてわたしたちはただ受容するしかない。時が来て、自然に訪れる死も、ある意味では同様と言える。受身形として《生命》を受けたわたしたち人間は、自らの《生》と《死》をどのように理解し、《生きる》ことをどのように考えていけばよいのか。また、「自己」と「他者」、その「関係性」を学び、生命倫理の問題に理解を深めていく。</p>	
	科学技術論	<p>科学技術が歴史的にどのようにして成立したか、制度としてどのような仕組みをもつのか、他の文化とどのような点で異なるのかを、科学哲学、科学思想史、科学社会学の視点から検討する。とくに科学が直面するさまざまな問題をパラドックスとして論じることで、科学固有の方法論を浮き彫りにしてゆく。</p>	

教養選 択科目	法学	国家によって制定される法は、人が社会生活を営む上での正式なルールである。中でも憲法は、国の治め方に関する根本的な仕組みを定めた最高のルールであるといえる。本講義では、日本国憲法を頂点とする国内法の体系について学び、憲法が定めるこの国のかたちを明らかにしたい。講義ではできるだけ具体的な事例を用いて説明し、自らの持つ権利と義務について考えられるような機会を提供する。	
	歴史学	ミュージカル「屋根の上のバイオリン弾き」の舞台となったロシア（東欧）のユダヤ人の世界を中心に、ユダヤ人の歴史や文化について講義する。	
	化学	私たちを取り巻く物質は全て化学物質と呼ばれる。すなわち、食品や農業環境で取り扱うものは全て化学物質であり、その化学物質についての基礎的な知識は新しい生産物や製品の素材や成分について理解する上で重要なものとなる。本講義では、食品や環境物質として重要な素材や成分を例として取り上げ、イオンや金属、ビタミンやホルモン、タンパク質などの基となる有機化合物について解説し、これらがどのように生成し、そして働き、最後に分解する過程を学ぶ。	
	生物学	自然科学系の基礎となる生物学の基本的な内容について習得することを目標とする。生命体は物質のみからなるが、構成する基本的な物質について講義する。生体を構成する元素の種類とその性質、生体内での主な役割について説明し、生体成分であるタンパク質及び核酸について解説する。また、自立して生命現象を営む生物個体の最小単位である細胞の基本構造及び機能について学ぶ。細胞分裂の種類と目的、細胞周期について説明し、細胞の進化と生命の連続性について論じる。さらに、真核生物と原核生物を比較し、細胞の進化について概説する。	
	確率と統計	実験や観察などで得られたデータの整理、各産業で企業等の経営の中で発生する数値データの分析を行う能力を身につけるため、分布、分散、相関、標本、カイ二乗検定、t検定といった基本的な統計の実施方法について講義と演習を行う。また、表計算ソフトを用いてデータの整理と処理を行い、様々な角度から分析と考察を行う。	
	スポーツ	バドミントン、卓球の実技を通して、健康管理の講義内容を実践理解すると同時に、身体活動（運動やスポーツ）の意義を理解し、自己の身体状況を十分把握しながら適切な身体活動を行い、総合的な生活体力の向上と健康の保持、増進に努める。	
	中国語Ⅰ	この授業では中国語初級の教科書を用いて、中国語の基礎的な部分を学ぶ。発音や文法といった中国語学習者が苦手とする部分を重点的に指導していく。	
	中国語Ⅱ	この授業では「中国語Ⅰ」に引き続き、初級中国語の教科書を用いて、中国語の基礎的な部分を学ぶ。教科書のほかに補充資料を用いる。	
	韓国語Ⅰ	韓国語の基礎を習得することを目指す。ハングルの書き方、読み方、発音を学習した上で、日常生活でよく使われ韓国語習得の基礎となる文法、構文、基礎語彙を習得する。簡単なあいさつ、受け答えなど会話練習も行いつつ、簡単な意思疎通ができ、単純な作文ができるように学ぶ。映画やドラマ、歌なども取り入れて、韓国文化の理解を進める。また日本語との異同を検討しつつ、韓国語の文法的構造を理解する。テキストは「書いて覚える初級朝鮮語」（高島淑郎著）を用いる。	
	韓国語Ⅱ	基本的な韓国語を理解し、韓国語で簡易的な意思伝達ができる実力を養う。基本文法から発展して動詞、形容詞の活用法、助詞の種類、分かち書き、敬体を中心とした様々な文の終わり方を学ぶ。また時制の表現法を理解し、語彙力と慣用表現の習得に努める。韓国映画やドラマなどを題材に日常の韓国語会話でリスニング力を高めながら、韓国の社会、経済についても学び、ディスカッションを行う。テキストは「書いて覚える中級朝鮮語」（高島淑郎著）を用いる。	
職業とキャリア形成Ⅰ	世の中の仕組みを俯瞰的に把握するとともに、個人間あるいはマスメディアを媒介としたコミュニケーションの大切さを理解する。新聞・本・インターネット等種々のメディアを通じて情報を引き出し分析するための方法、また、文書媒体により他人に対して自分の意思を伝える方法を学ぶ。新聞社の会社見学を通じて、これらのノウハウを職業として実践している現場の状況を体験する。これらの講義を通じて、大学生、社会人そして職業の社会における位置づけを把握し、社会人となるために必要な基礎力を涵養する。	共同	
キャリア形成実践演習	社会に対して積極的な学生生活を送るとともに、周囲の人たちとコミュニケーションがとれるような人格形成を目的として、ボランティア活動、インターンシップ、地域の行事へ参加する。		

	職業とキャリア形成Ⅱ	「職業とキャリア形成Ⅰ」では、大学生、社会人そして職業の社会における位置づけを把握し、社会人となるために必要な基礎力を学んだ。本科目では、就職活動に向けて必要となる実践力を講義・演習形式で強化する。模擬面接やグループディスカッションの実践指導等を通じてコミュニケーション力、プレゼンテーション力、論理的な思考力を身につける。また、エントリーシートや履歴書の添削指導等を通じて、分かりやすい文章を書く能力について身につける。	共同
専門必修科目	基礎科学実験Ⅰ	生物学に関する基礎的な実験を、集中講義形式で行う。生物実験の基本操作や生物の観察を通し、生物学の基本的な内容を理解することを目標とする。生物の基本的な構成成分である核酸とタンパク質について電気泳動及び定量を行い、実験の原理や手順を体験することでその性質及び分析法を体得する。また、動物細胞を染色し観察を行うことで、動物細胞の特徴について学ぶ。植物の生命科学実験を行うための基礎として、顕微鏡の取り扱いを概説する。さらに、自然界における微生物の存在を、微生物の培養及び観察を介して論じる。	共同
	基礎科学実験Ⅱ	化学実験として、金属イオンの定性的な分析からその性質を学ぶ。また、pH測定実験から酸性や塩基性（アルカリ性）の性質を学ぶ。さらに有機化合物について性質を学ぶためのコンピュータ利用法の修得と、有機化学成分の抽出と分離、そしてクロマトグラフィーなどによる精製法について学ぶ。精製した有機化合物の性質として特に結晶を理解するため結晶化の方法などを学ぶ。	共同
	地域活性化フィールドワークⅠ	(概要) 地元の商店街など、地域産業の活性化について学生が主体的に考え、商店の活性化の活動に移し、行動の中から学ぶことを目的としたフィールドワークを行う。学生が4～8名程度でグループを構成し、各グループで地元の新津商店街などの企業の活性化策である新商品開発やサービスについて、店主と共に検討する。学生が社会との接点を早期に持つことで、学ぶことの意義と重要性を認識し、将来の進路を検討する機会を広げることができる。(オムニバス方式/全15回) (6 村瀬 博昭/10回) フィールドワークを行う前の基礎的な産業経営(企業経営)についての知識習得のための講義を行う。また、中間報告及び最終報告にてグループにフィードバックをする。 (5 姜 理恵/5回) フィールドワークの進捗を確認し、学生グループの検討方法や向かう方向に課題があれば解決の示唆を与える。	オムニバス方式
	地域活性化システム論	地域社会の活性化は、産業の経済的な発展だけではなく、地域の伝統文化の維持やコミュニティの形成など、非経済的な部分の発展も満たして実現される。地域活性化を担う人材には、産業の活性化を行う経営的能力のほか、活性化の計画を行う能力および計画を実践する能力が必要となるため、一連の計画から実践までの理論に関する講義を行う。また、生命産業の発展を行いながら、非経済的な活動も並行して考え、実践するための計画づくりを実際に行い、地域活性化を担うために必要な知識と専門能力を身につける。	
	学習論	効果的・効率的な学習の方法について講義を行う。要点の捉え方、メモ・ノートの取り方、予習の重要性と実施方法、復習の役割、手帳・スケジュール帳の活用方法、書籍の読み方、将来の目標の立て方と効果的な活動方法、モバイルツールの活用方法といった、あらかじめ知っておくことで効果的な学習につながる学び方の技術について講義する。	
	ITリテラシー基礎	ITに関する基礎的な知識を身につけるための講義を行う。前半は、ITに関する基礎用語のほか、戦略やマネジメントなど、システムの上流工程の構造について学習し、ITパスポート試験の科目学習に必要な知識を養う。後半は、ITパスポートの試験内容に合わせた、ストラテジ系(企業と法務、経営戦略、システム戦略)、マネジメント系(開発技術、プロジェクトマネジメント、サービスマネジメント)に関する学習を行う。	
	ITリテラシー応用	ITに関するプログラミング関連の知識習得のほか、ITパスポート試験合格に向けた科目学習を行う。ITパスポートのテクノロジー系科目である、基礎理論、コンピューターシステム、技術要素の学習内容に合わせたプログラミングやシステムの下流工程について学習する。最終的にはITパスポートの試験合格を目指す。	
	コンビニエンスストア論	ビジネスアワーのグローバル化、女性の社会進出、フレックスタイムの導入等々で、ビジネスアワーの24時間化が進行している現在、食の外部化が顕著となり、物販及び食(中食)の提供を担うコンビニエンスストアの存在は大きく、一大産業となっている。コンビニエンスストアのトップ企業は、老舗百貨店の売り上げ規模を凌駕し、その社会的影響力も時と共に大きくなっている。他方、その存在意義と役割を学問的に体系的に教えていく学科・科目は極めて少なく、当学科内における当科目がコンビニエンスを論じる初の試みとなる。実際の現場での活動や、商品開発の現状、あるべき姿等を分かりやすく解説し、実社会で役立つ人材教育を推進する。	

	食品管理論	食品の製造から流通を経由し、最終消費されるまでの工程において、製品品質管理や生産に係る製造管理および流通管理は、生活者の要求を十分満たし食品を安定的に供給する上で欠かすことのできない管理項目である。顧客および生活者の要求を満たす食品を安定的に製造し、供給するための品質管理手法・生産管理手法・流通管理手法を体系的に学ぶ。食品製造現場の適正製造規範から一般衛生管理プログラムなどの品質管理や適正な製造を維持するための安全性を担保するマネジメントシステムなど実際の食品工場の多くの改善事例について講義する。		
	歴史・風土から見た食環境	環境には自然の環境だけでなく永く歴史の変遷により形成された文化的環境で、食を取り巻く様々な環境を「食環境」と称する。風土やその時代の生活者によって育まれた日本の食環境（食文化）の生い立ちやその後の歴史的变化を学ぶ。伝統的な食文化を形成した地域性に特化された食材や特殊な調理方法。家族や地域に育まれた郷土色あふれる味覚と嗜好。四季それぞれにまつわる行事食。新潟県の代表的な郷土料理や食材の調理方法など実際にふれて、地元事業者との地産地消の動きや食の知恵など体験活動交流など学ぶ。		
専門必修科目	中食・外食論	中食・外食は国民の生活に欠かせない存在となった。中食産業は時代背景やマーケティング要素を組み込んだ独自のブランド力で価値を高め続けており、外食産業は欧米スタイルのレストランやファーストフード店の参入、バブル期の高級レストランブーム、低価格競争時代へと日本経済と共に常に変化を伴ってきた。結果として、日本の中食、外食産業は国際的に見てもトップレベルのクオリティを誇る。この講義では、ヒットの裏側に隠された様々な企業努力をこれまで、そしてこれからの産業進化の事例から実践的に学ぶ。		
	自然共生論	人類は、自然環境の中で長い年月を掛けて他の生物および生物以外の各種要因と複雑かつ巧妙な関係を築きあげている。すなわち、人類は地球上の生態系とその恵みに依存しているといえる。本科目では、生態系とは何か、生態系を構成する種の多様性、生態系の多様性そして種内の遺伝的多様性などを含む生物多様性を取り上げ、我々がどのように生態系と向き合い、失われつつある多様性について現状を知り、その保全と維持の取り組み方について農業環境を中心として論じる。		
	生命産業に関わる情報システム学	(概要) 今日、すべての経営は情報技術 (IT) と密接な関係にある。企業は情報システムに多額の投資をし、現状を打破し、相手企業より競争優位に立とうとしている。本講義ではまず、情報システムとは何か、その来歴と概要、現状といった基本的な知識を踏まえたのち、ITと経営学上の競争優位がどのような関係にあるかを学ぶ。その上で、生命産業の発展や競争において、情報システムがどのような働きをしているのか、複数のケーススタディを通じて検討する。また、生命産業における情報システムの役割と可能性も議論する。(オムニバス方式/全15回) (22 中嶋 開多/5回)【基礎編】として、ビジネスや社会におけるさまざまな課題について、ひろく情報とシステムの視点から捉える情報システム学の理論と方法について講義。 (5 姜 理恵/10回)【応用編】として、生命産業を中心に企業のIT活用に焦点をあて、その経営戦略上の意義を浮き彫りにしていく。本授業ではとくにケーススタディを重視し、ゲストスピーカーとの議論を通して受講生自ら問題の本質について深く考える機会を提供する。	オムニバス方式	
	ブランド構築論	消費者の食品に対する関心を高め、もってその付加価値を高める「ブランディング」の手法は、TPP時代を迎える今、農業を含めた国内食品産業にとって必須のものとなりつつある。また環境についても、人々の特別な関心を喚起するうえで、ブランディングという手法は今後注目されてくるに違いない。ブランド構築論では、単なる知識としてのブランド理解に留まらず、消費者との深い絆をつくり、生産者には利益を、消費者には満足をもたらす実践的マーケティング手法であるブランド構築を、その理論から実践までを現実の例に即して学ぶ。		
	情報収集論	情報収集を効果的・効率的に行い、産業を活性化させる人材に必要なリサーチ能力を養うための講義を行う。情報収集はアナログからデジタルまで一連の収集方法の全てを習得することで、網羅的な情報収集を行い、偏りのない分析や状況判断を行うことができる。雑誌や記事の文献調査、図書館の活用方法、ヒアリング・アンケート等のアナログの情報収集のほか、インターネット検索、記事検索、専門分野のデータベースの活用等のデジタルな情報収集まで、状況や条件に即した方法を選択して情報を収集する能力を身につける。		

	産業経営管理論	農業、生命産業、食品産業など、事業経営に必要な知識の習得のための講義を行う。経営戦略論、組織論、管理論の3部構成で、経営管理の一連の知識を学習し、産業を担う人材に必要な知識を身につける。経営戦略論では、学部に関連する産業の事例を用いながら、社会で企業方針を決定する一連の方法等について学習する。組織論では、組織形態のパターンを学習した上で、各組織の特性や役割について学習する。管理論では、マーケティングや社会的責任など、社会における企業の位置付けを中心に学習する。	
	生命産業のビジネス論	食、農、医療・介護、環境等、生命の維持・サステナビリティに深く係る産業領域は、今後の新たな成長分野としての発展が期待される新分野である。当該分野においては、さまざまな新技術の開発成果利用や、消費者・生活視点からのビジネスモデルの構築等を通じ、個々の閉じた領域を超えた新たな価値連鎖（バリューチェーン）が生まれつつある。本講義では、個々の事業分野における新旧企業の取組みをレビューし、その価値連鎖の意味合いを理解するとともに、そうした価値を創出するためのアプローチの視点を学習する。	
専門必修科目	生命産業経済学	(概要) 生命産業における経済について、マクロ経済とミクロ経済の観点から講義を行い、業界の知識を深める。マクロ経済では、経済政策のほか、生命産業の状況について、生産、失業、貿易などについて講義を行う。ミクロ経済では、業界内の企業の事例を取り上げながら、市場の需給理論やゲーム理論等について概要を学習する。(オムニバス方式/全15回) (5 姜 理恵/10回) 食品産業、環境産業を生命産業という観点から捉えなおし、生命産業をめぐる経済学的問題を基礎的な経済学を学びながら議論、検討する。具体的には循環型社会、持続可能な開発、生態系と生物多様性の経済学、市場の失敗、ライフサイクル・アセスメントなどをテーマに取り上げ、理論と背景を学んだのち、実務従事者をゲストスピーカーに招く、必要に応じてフィールドワークを行うなど、多面的な講義を展開する。生命産業を学ぶにあたって学生一人一人の問題意識を形成するよう促す講義とする。 (6 村瀬 博昭/5回) ミクロ経済学を担当。産業振興の視点で、企業活動を行う上で必要な経済学の知識について講義する。	オムニバス方式
	食品科学概論	(概要) 食品を科学的に捉える目を養うことを目標におく。人はなぜ食べなくてはならないのか、食べたものは体内でどのように変化するのか、食品に必要な条件はなにか、食品を作るとはどのようなことか、食品のもつ様々な特徴、性質を科学的に理解する能力を涵養する。(オムニバス方式/全15回) (2 浦上 弘/6回) 食品を科学的に考えるとどのようなことか、そのために必要な科学的思考、食品の安全性などについて講義する。 (1 石黒 正路/2回) 食品の味、色、香りなどの官能的な側面を解説する。 (1 3 西田 浩志/4回) 主要な栄養素と食品の機能性について講義する。 (1 2 重松 亨/3回) 食品を作るために必要な調理、加工、貯蔵などの基本的な技術、および発酵、バイオテクノロジーについて講義する。	オムニバス方式
	食品開発論	食品を取り巻く産業において、市場にその加工品および製品を導入するための様々な視点を学ぶ。食品産業におけるビジネスとして成り立つための「ものづくり」と「ことづくり」の基本を学ぶ。幅広い市場(世界)感からみたマーケティングに始まり、市場のニーズ・ウォンツ・シーズの見つけ方を実践的な実施例を参考に講義する。幅広い食分野に関する知識を必要とする開発分野で、その開発の目的を達成するための手段や戦略を立案できる可能性ある人材育成の基礎講義とする。	
	環境科学概論	科学技術の発展と生活水準の向上に伴い、人類による環境汚染・環境破壊は地球環境と生命を脅かしている。本授業では、人類と地球との共生と地球環境・生命の保全を主眼に地球環境と日本国内の環境について、現状を説明し対策について解説する。農業、難燃剤などの意図を持って使用される有害な化学物質による環境汚染や、ダイオキシンのような意図によらず汚染を引き起こした化学物質による環境汚染、資源の大量消費に伴う環境問題など幅広い題材について概説し、理解を深める。	

	生命産業に関わる法学	<p>(概要) 食品産業やバイオ関連産業、環境関連産業などに関連する法律、規制、指針などについての基礎的な知識を習得すると同時に、法などの根拠となる考え方を学ぶ。(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(20 清水 俊雄/3回) 法の存在意義、法と科学の関係などの基礎的な概念、および食品に関連する法律の概論を行う。</p> <p>(2 浦上 弘/5回) 食品産業に関わる法律、規制、条例、指針などを具体例を示しながら講義する。輸出に必要となる外国の法律や国際的な規格についても講義する。</p> <p>(11 川田 邦明/7回) 環境保全に関わる法律、規制、条例、指針などを具体例を示しながら講義する。特に地球環境の保全や資源循環と廃棄物についても講義する。</p>	オムニバス方式
	社会調査論	市場調査や顧客分析など、産業の中で企業が新商品開発や新サービスを検討する際に頻繁に実施される社会調査について、実施方法の基本を習得する講義を行う。本講義は認定資格「社会調査士」のA科目の内容に類似した構成とし、受講後、社会調査士の資格取得を希望する学生に対して、提携校での受講を含めた個別のアドバイスを実施する。	
	論理的思考論	これからの産業を牽引する人材にとって、ビジネスの現場において自分の考えを正確かつ魅力的にアピールすることは必須のスキルである。そのためには自分の思考および伝えたいことを論理的に整理できる能力が必要になる。ここでは、その能力を基礎から身に付けることができるように、論理学の初歩から始まり、考えの整理の仕方、表現方法などを学ぶ。さらに、それを応用したロジカルライティングおよびプレゼンテーションについても、実習を交えながら学習する。	
専門必修科目	産業プロデュース論	新規の事業領域を創出する取り組みには、その領域や分野を超えた普遍的な視点や姿勢、アプローチの方法論がある。生命産業領域での新たな取り組みにおいては特に、個別の小さな取り組みが事業になり、企業になってやがて新産業を形成するという事業創造のダイナミズムの理解が必要不可欠である。本講義においては、新商品・新サービスの開発プロセスを、広く内外の各領域における事例研究を通じ理解するとともに、主体性を持って事業創造を主導するプロデューサー機能(組織・人材)について学習する。	
	レギュラトリーサイエンス	<p>(概要) 科学技術を社会に望ましい姿に調整する役割を担うレギュラトリー・サイエンスの成り立ち、その手法、法律や規制との関連を学ぶ。(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(11 川田 邦明/9回) レギュラトリー・サイエンスの概説とリスク分析の基礎について講義するとともに、環境分野におけるレギュラトリー・サイエンスを物質管理、事故例、環境基準設定、環境データの評価・予測などを通じて学ぶ。</p> <p>(2 浦上 弘/6回) 食品でのレギュラトリー・サイエンスを、BSE、残留農薬、食品添加物、肉の生食などの事例を通じて学ぶ。日本で中心的な役割を担う食品安全委員会の役割と活動についても講義する。</p>	オムニバス方式
	産業マーケティング論	マーケティングは、単なる商品販売のための営業のことを意味するのではなく、商品やサービスの価値を個人や企業等に届けるための仕組みであり、顧客との相互作用を通じて、新たな市場を創造していくプロセスのことを意味している。本講義では、誤解されがちなマーケティングの概念を、その発展の歴史とともに確認した上で、社会貢献型マーケティングやグリーンマーケティングなど、マーケティング分野における最新動向を具体的な事例を交えて学習する。	
	地域活性化フィールドワークⅡ	<p>(概要) 地域産業の活性化のため、学生がグループで地域の企業の経営診断を行う。講義で学習した知識や経験を活かして、フィールドワーク形式で社会での実際業務を行い、最終的には実際に企業の新商品を開発したり、新サービスの実験を行う。(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(6 村瀬 博昭/10回) フィールドワークを行う前の産業経営についての知識習得及び復習のための講義を行う。また、中間報告及び最終報告にてグループにフィードバックを出す。</p> <p>(5 姜 理恵/5回) フィールドワークの進捗を確認し、学生グループの検討方法や向かう方向に課題があれば解決の示唆を与える。</p>	オムニバス方式

	卒業研究	<p>大学で学んだ能力を卒業後の社会又は大学院で発揮し、活躍する人物となるための集大成の学習として、卒業研究としてビジネスモデルを構築する。社会で実際に行われるビジネスプランの構築方法と同様、ビジネスプランの検討、ターゲットの選定、市場調査、商品・サービス開発、市場テスト等を行い、結果を分析して考察し、ビジネスモデルを研鑽して事業化するまでの一連の業務を、これまで学んだ知識と実践を活かして実施することで、産業の活性化に資するプロデュース力の基礎を確立させる。</p>	
専門 選択 科目	1次産業論	<p>1次産業の業界構造、現在の課題、産業従事者の特徴、政策による支援、課題解決の方向性など、業界の最新の状況について講義する。また、1次産業の先端的な取組について事例学習を行い、なぜそのような取組が行われているかについて考察を行う。事例は、特に生命産業と関連の深い農業及び漁業を中心に学習することで、知識を実践に応用しやすくできる。</p>	
	2次産業論	<p>食料品は、世界中の生活者の「命」や「暮らし」を支え、健康な生活を送る上での不可欠なものである。食品製造業の社会的貢献は重要な使命を持っている。新潟県を代表する主要な食品製造業における食品加工および製造技術を学ぶ。代表的な食品製造業における食品の製造を支える食品加工技術の基礎技術や食品加工学を学ぶ。さらに主要な食品製造業の生産動向や経済動向など市場動向や人口動態および消費構造の変化などを学び、将来の食品関連2次産業の方向を解説する。</p>	
	3次産業論	<p>いま日本の「おもてなし」即ちサービスの価値が世界中から注目を浴びている。また製造業（2次産業）がサービス産業（3次産業）へと裾野を広げることで成長している産業は少なくない。なぜここまで日本の3次産業は発展したのか。日本のサービス産業の競争力と業界を盛り上げている取組みや仕組みを実践に即して学ぶ。また、3次産業の活性化がもたらす地域コミュニティの形成や地域資源の見直し、ジャパングオリティーの発信について、具体的な企業事例のヒアリングや体験を通じ総合的に学ぶ。</p>	
	6次産業化論	<p>世界的な競争や人口減少による農業の転換の時代を迎えた農業生産の付加価値化の視点から、また多様化する消費者ニーズ、中食・外食やコンビニなど急激に変化する食品市場の変化の視点から、農業県であり食品産業の盛んな新潟県の強みを活かした農業の6次産業の展望と構想について学ぶ。後継者不足に悩む農村部において6次産業の発展は若い農業者を多数輩出することから中山間地の地域振興ともなることも学ぶ。</p>	
専門 選択 科目	食文化論	<p>和食がユネスコの無形文化遺産に登録される中、食というものの暗黙知価値を体系的に理解し、その暗黙知価値を現在の価値認識に表出化した形式知化していく必要がある。本科目においては、世界の食を対象に、その成り立ちや文化、気候、食材等々の食を構成している要因を知りながら、その完成のプロセスと文化的価値と併せ、その地域における歴史や調理法、伝統食の存在背景等々を理解し、新たな食文化論を認識していくものである。</p>	
	生命産業情報論	<p>変化のスピードが速い現代では、生命産業をはじめとして全ての産業分野において、ビジネスの様々な場面に情報通信技術を活用することによって事業を活性化することが求められている。例えば、新商品開発、サービス開発、経営分析、市場・顧客分析などで情報通信技術が応用され成功を収めている。ここでは、そういった事例から重要となるポイントを抽出して講義することで、情報通信技術の重要性と先端的な活用方法を学習する。また、世の中の変化のスピードについていくために必要となる情報収集手法を学ぶ。</p>	
	低炭素論	<p>大気中にも存在する二酸化炭素は、従来、必ずしも有害物質と認知されていなかった。ところが、地球温暖化問題の顕在化とともに、二酸化炭素には温室効果ガスとしての有害性が存在することが明らかとなり、低炭素型社会を構築するための活動が世界的に活発化している。本講義では、二酸化炭素を中心とする温室効果ガス等に関する基礎を簡単に理解した後、温室効果ガスの排出抑制のための世界的な取組みの最新動向、温室効果ガスの排出抑制が生み出すビジネス機会等について、学習する。</p>	
	環境汚染論	<p>人類によるエネルギーと資源の大量消費は地球環境問題を引き起こし、人類の脅威となっている。人間活動に伴う様々な化学物質による環境汚染は、地球環境問題の主要な一角を占める大きな問題である。本講義では、これまでの環境汚染問題について振り返るとともに環境汚染において問題とされる意図、非意図的な化学物質による汚染や資源開発と消費に伴う汚染、人類の生活に伴う環境負荷による汚染などに関して、環境科学概論における基礎理解を前提に詳説する。</p>	

コミュニケーション論	<p>人間社会においてコミュニケーションは社会形成の基礎である。個人対個人、集団対集団、集団対個人におけるコミュニケーション活動は、プロデューサーを育成する本学科の重要なスキルである。プロデューサーとして活躍する現場内の個人対個人のコミュニケーションに始まり、プロデューサーが所属する集団対集団、集団対個人にいたるまで、その原理と社会的実践について事例を引用しつつ学ぶ。後半には企業や集団活動におけるコミュニケーション戦略の基礎を学び、プロデューサーとしてのコミュニケーション戦略が立案できるようになることを目指す。</p>		
プレゼンテーション論	<p>プレゼンテーションとは企業や組織、集団が自分たちの活動の強みを相手や社会に説明し、自分たちの活動への賛同を得ようとする行為であり、企業や集団の活動の成功のためには欠かせない手段である。実際に企業社会ではプレゼンテーションの可否によってどんなに良い企画であっても陽の目を見ないことも起こっている。プレゼンテーションの社会的、心理学的意味についてその基礎を理解し、社会で行われている様々なプレゼンテーションの実態を学ぶことを通じてよりよいプレゼンテーション力が身につくことを学ぶ。</p>		
産業プロジェクト管理論	<p>(概要) プロジェクトを自ら管理して、業務を遂行させるための管理能力の養成のための講義を行う。具体的な新商品開発について、自らスケジュールを管理し、計画通りに物事を遂行して、計画外の出来事に対処したり、プロジェクトを俯瞰的に捉えて最善な意思決定を行うための能力を身につける。(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(6 村瀬 博昭/5回) プロジェクト管理の意義、社会で用いられているプロジェクトの事例学習、プロジェクトの進捗が計画通りでない場合の支援を行う。</p> <p>(4 村岡 元司/5回) 経営資源の確認、スケジュールの立て方、組織管理能力、顧客マネジメント能力など、プロジェクト管理に必要な能力や準備についての講義を行う。</p> <p>(3 伊藤 満敏/5回) プロジェクト管理の具体的な実践方法について、学生が実施する前の見本を見せながら講義を行う。</p>	オムニバス方式	
生命産業デザイン論	<p>産業の活性化のために必要なデザインの活用について講義を行う。同じ商品でも、デザインの違いにより販売状況が異なる現状を示し、デザインの必要性と効果的なデザインについて学習する。また、デザインにより商品やサービスに付加価値をつけられることを理解し、市場においてデザインの力を積極的に活用するプロデューサー力を身につける。本講義では、学生が自らデザイン能力を身につける美術的な学習は行わず、デザイナーと連携して商品特性に向けたデザインを提案する能力を身につける学習を行う。</p>		
専門 選択 科目	情報共有論	<p>(概要) 情報を共有する仕組みを学んだ上で、情報取得、発信のプロセス、人同士が情報を共有するコミュニケーションの基礎知識を習得する。またこれらによって生まれた生命産業関連のビジネスやインフラ、ライフスタイルについても議論、検討する。講義中にはパソコンやケータイ、スマートフォン、デジタル家電などのデバイスを実際に操作する。また本講義のSNS(フェイスブック、ツイッターなど)を開設、講義内容・学習情報を共有するなど「情報共有」を実践する講義とする。(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(22 中嶋 開多/5回) 【基礎編】として、コミュニケーション論の視点から、ビジネスや社会における情報共有について講義。</p> <p>(5 姜 理恵/10回) 【応用編】として、とくにIT活用に焦点をあて、その可能性について論じていく。本授業ではケーススタディを重視し、ゲストスピーカーとの議論を通して受講生自ら問題の本質について深く考える機会を提供する。</p>	オムニバス方式
生命産業に関わるコンサルティング論	<p>先端技術の利用に際しては、技術によって実現できることをどんどん進めるのではなく、技術によって実現されることを社会的側面や倫理的側面から判断し、必要な場合には、技術の利用用途に制限を設けることも必要になる。例えば、生命科学技術で実現できることを推し進め、クローン人類を誕生させることが、社会にとって正しいことであるか否かは、深い検討が必要になる。本講義では、最先端技術として生命技術を取り上げ、同技術の産業利用に際して求められる社会的影響の評価、関係者との合意形成、世界各国における取組みの現状等について学び、求められるコンサルティングのあり方を理解する。</p>		
知的財産論	<p>日々の活動によって生じる創造物を知的財産と呼び、社会の発展とともにその重要性が増している。特に企業の活動において生みだされる創造物については、その権利の確保が重要な課題である。本講義においては現場における実際の例として食品関連分野の事例などを取り上げ、知的財産権を身近な課題として国内での特許の取得や国際的な特許としての展開のための活動内容について学ぶとともに、実際に特許事項について自ら特許書類にふれることによって、実務的な内容を学ぶ。</p>		

	リサイクル論	製品の製造と消費は、経済活動の根幹であり人間社会と生活に必要不可欠であるが、同時に製品の製造時、使用時、廃棄時のライフサイクルにおいて生じる環境負荷は、今日の環境問題の主要因である。本講義においては環境科学概論における生産活動、資源消費に伴う環境問題への理解を前提に、製品ライフサイクル全体を通したリサイクル技術について詳説し、その適応事例について学ぶ。また近年の資源価格の高騰を背景とした廃棄物処理の産業化について概説し、環境産業の発展に執拗な要素についての理解を深める。	
	食品香粧学	食品分野において「味」と「香り」、そして「色」は、大変重要な要素となっている。「色」は文字通り見た目、「香り」は「フレーバー」として食品を特徴づけ、「味」はまさしく口に入れてその可否を判断する重要なファクターである。最近の「色」「香り」「味」の研究情報を学び、さらにこれらのファクターが及ぼす食品の嗜好についても学ぶ。また、食品のみならず、化粧品や入浴剤など「アロマ」や「フレグランス」の分野についても、香料の観点から開発や加工について学ぶ。	
	食品製造論	食品製造の特徴を突き詰めて考えると、①対象が生物素材であること、②原料の特性が不定であること、③操作が多目的であること、④併発する諸現象を制御しなければならないこと、などが挙げられる。物理的・化学的・生物的技術による単位操作の組合せにより上記の特徴をうまくクリアしながら工業規模で食品を製造する科学と工学を踏まえて、様々な食品の食品製造プロセスを学ぶ。	
	環境技術論	生命圏としての地球環境を保全するために、環境保全のための法体系を概観し、環境アセスメント、リスクアセスメント、リスクマネジメント、リスクコミュニケーションなどについて、基本的概念と事例による実際を説明する。さらに環境科学概論における基礎理解を前提に、環境アセスメント及び環境マネジメントについては具体的な事例研究を通じて、環境汚染のリスクの評価とその技術、評価されたリスクをマネジメントし低減するための技術について学習を行う。また、大気、水環境及び生態系保全のための技術とその運用事例を説明する。	
	スマートシティ論	人々の生活や産業活動に不可欠なエネルギーをICTを活用して賢く使う仕組みをまちの中に取り入れ、新たな地域づくりや地域活性化に生かそうとする取り組みが、国内でも海外でも活発化している。本講義では、スマートシティ・スマートコミュニティ等のいわゆる“スマート”なまちづくりの基本コンセプトを理解するとともに、世界各地で取組まれている最新の事例をもとに、今後のスマートなまちづくりのあるべき姿、その中におけるビジネスのあり方を学習する。	
専門選択科目	健康食品論	我が国の平均寿命は世界最高水準を保持し続けている。一方、「健康寿命」も同様に最高水準であるが、こちらは上昇傾向は認められない。両者の差は開く一方で、医療費の負担が国家予算の多くを占め問題となっている。これまで健康食品市場は着実な伸びをみせ、平成26年時点で2兆円規模に迫ろうとしている。健康食品ビジネスは、このような急激な環境変化にあっても確実に対応しなければならないし、新たなビジネスチャンスを開いた分野として注目されている。本講義では、薬事法に定められる食薬区分の理解を原点として、これまでの様々な法規の変革を理解すると共に、今後の成長が見込まれる食品ビジネスの各分野に関する深い理解に繋げる。	

(注)

- 1 開設する授業科目の数に応じ、適宜枠の数を増やして記入すること。
- 2 私立の大学若しくは高等専門学校の出発定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。